

ユダヤ・モダニティの推進者と避難民
—19世紀におけるドイツ・ラビの西方および東方移民—
Propagators and Refugees of Jewish Modernity:
Westbound and Eastbound Emigration of German Rabbis
during the Nineteenth Century

報告者：カールシュテン・L・ヴィルケ
CARSTEIN L. WILKE

Central European University, Budapest, Hungary
中央ヨーロッパ大学、ブダペスト

訳者：向井 直己
MUKAI NAOKI

京都大学大学院人間・環境学研究科

Kyoto University, Graduate School of Human and Environmental Studies

キーワード

ヨーロッパ史 ユダヤ史 モダニティ ユダヤ教 移民

Keywords

European History; Jewish History; Modernity; Judaism; Migration

Quadrante, No.19, (2017), pp.205-221.

訳者解題

カールシュテン・L・ヴィルケ教授は、丹念な文献検証と、ユダヤ学の既存の「専門領域」ととらわれない幅広い関心を結合させた、稀有な研究者の一人である。彼の取り扱う主題は、後期中世のスペイン・ポルトガル・フランス・オランダ等のいわゆる「セファラディ」文化から、中・東欧を中心とした「アシュケナージ」の近代・現代文化に至るまで非常に多岐にわたる。

その業績のなかでもとりわけ貴重なのは、ヴィルケ教授が最終的なとりまとめに携わった Carlebach/ Brocke 編 *Biographisches Handbuch der Rabbiner (BHR)* (De Gruyter 2004)であろう。これは1781年から1871年までに、ドイツ・オーストリア・ボヘミア・ポーランドでラビの叙任を受けた人々の活動をまとめ、さらにそれを深く研究するためのアーカイヴ情報まで取りまとめた、他に例を見ない画期的なラビ・人物事典である。歴史研究にせよ、思想史研究にせよ、最終的に頼らざる

を得ないのは一次資料である。個別論文では十分に確認できない細かなリソースを探るとき、この網羅的な人物事典にどれほど助けられたことだろうか。

BHRの企画を立てたのは、近代ユダヤ社会史の硯学として知られるユーリウス・カルレバハ(1922-2001)である。ユダヤ研究において、或いは広く歴史研究において我々が度々出会う「ラビ」とはどのような制度的基盤を持ち、それはどのような社会的・文化的背景に支えられたものなのか？カルレバハの問いは、ひとまず『アシュケナージ・ラビ制度』(*Das Aschkenasische Rabbinat*, 1995 Metropo)としてまとめられたが、これはどちらからかといえば、問いの深さを示すスケッチ的な著作に終わった感が否めない。1997年、カルレバハは「アシュケナージ・ラビの歴史」研究プロジェクトの研究助成を受けたものの、その最終成果が現れる前に没した。彼の残した課題を、期待された以上に細やかな手つきで完成させたのがヴィ



ルケ教授であった。プロジェクトの中途成果としてヴィルケ教授が出版した『タルムードとカントを』(*Den Talmud und den Kant*, Olms 2003)は、それ自身、事典と見まがうような分厚い著作であるが、そこでは以下でも主題となっている「ドクター・ラビ(大学の博士号と律法学者)」という類型が如何にして生まれ、ユダヤ共同体にとって必須の指導者となっていったかが、地域的な偏差を取り込みながら、丹念に辿られている。

ヴィルケ教授の業績はこれに留まるものではないが、「モダン化」の過程にあるラビの動向を俯瞰的に描写した今回の講演は、主として上記の二作に代表される研究に基づくものである。この講演は、東京外国語大学「境界地域の歴史的経験から再考するヨーロッパ史概念」(日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」)を主催とし、京都大学人文科学研究所「現代／世界とは何か」研究班の協力のもと、「ユダヤ・モダニティの推進者と避難民—19世紀におけるドイツ・ラビの西方および東方移民—」、と題して、2016年7月8日、京都大学人文科学研究所にて開催された。

解放以前のラビ制度の根幹にあったポーランド＝リトアニア王国が解体され、ナポレオンがヨーロッパ中に引き起こした混乱も一定程度終息した19世紀の初頭、アシュケナージのラビたちはどこからどこへ、何を理由に動き、当地の社会をどのように変容させ、また自らがどのように変容したのか。人物を焦点化せざるをえなかったBHRの事典的記述からは見えてこない学派や宗派の流れを、アメリカからロシア、パレスチナに至るまで、ヴィルケ教授は明瞭に解説している。

まずはヴィルケ教授に、そして本稿の翻訳の機会を与えてくださった東京外国語大学篠原教授に感謝したい。

(訳者)

報告訳文

目次

1. ヴュルツブルク出身の神秘的モダニスト
 2. 北西ヨーロッパにおけるドイツ式の人物の一般像
 3. 古いオーソドックスの避難民
 4. サンクトペテルブルクとニューヨークの間の中央集権化の課題
 5. 1848年以降のグローバルな労働市場
 6. トランスナショナルリティと秩序への希求
 7. 国家の対立とドイツ圏の周縁
- 結論

1. ヴュルツブルク出身の神秘的モダニスト

19世紀の前半、ドイツのラビ制度は文化的適合(acculturation)と専門職業化の時代に入り、アカデミックな訓練を受けたラビという新しい型の学者を登場させました。こうした文化的な経歴を持つラビたちは、ラビの知識と権威が住まう伝統的領域だったユダヤの宗教法(ハラハー)に熟達する一方で、モダンでかつ歴史的・文献学的にユダヤ教を学習するという発想を体現するものでした。ユダヤ人解放期(1781~1871年)を通じて、こうした新しい種類の宗教的知識人は、論争も交えつつ、最終的にはドイツ・ユダヤ共同体の生活の統合を成功させることとなります。しかし、ブレイクスルーのあったこの時期は、移民の時期でもあります。1829年に最初のモダン・ラビがドイツを離れてから、1871年までのあいだに、ドイツ同盟諸邦(オーストリアを除く)で生まれたり、あるいは活動していたりしていた105人あまりのラビが、この地域の外で地位を得ることになったのです。この数字は、前後の時代の移民を大きく上回るものです。唯一比較できるとすれば、1933年から1940年までの国民社会主義時代のドイツからの移民でしょうか。この時には、彼らの自由、尊厳、そして究極的には命に迫った喫緊の脅威から、225人のラビが逃れていきました。

2004年に私が出版した『Biographisches Handbuch der Rabbiner』に基づけば、この集団をつぶさに通覧していくことができます。これはドイツ語圏で解放期に活動していた2000人のラビ

たちの人物研究的な事典です。私はひとりひとり、すべてのラビたちについて、家族関係、訓練、キャリア、婚姻や出版物、肖像、イデオロギー的な信条、所属機関や評判等を収集しました。この講演の主題になっているモダン・ラビのトランスナショナルな移動は、いくつかの点で、彼らの先行者たちが以前から日常的に行っていた広範囲の地理的な交流の再構築であるように見えるかもしれませんが。しかしそれは、まったく違った動機に由来するものなのです。17世紀のラビ、リップマン・ヘラー・ヴァラーシュタインのような人にとって、ドイツ南部諸邦、オーストリア、ボヘミア、ポーランドの間にある国境を超えることには意味があったのですが、しかし、彼は同じアシュケナージの言語圏・文化圏のなかにずっと留まっていました。一方で19世紀になると、国外へ出てゆくラビたちはおおよそ彼らがドイツで知っていたとは別のユダヤ文化に直面することを予め知っていました。確かに、解放期のラビの移民というのは、1848年の後にピークを迎えたより広いドイツ・ユダヤ移民の一部といえなくもありませんが、こうしたドイツ・ユダヤ移民が主として大西洋を渡る傾向があったことを考えれば、一致する点は部分的なものにとどまります。1829年から1871年の間に40人のラビがアメリカ合衆国へと赴きましたが、彼らの同僚の同数は、東へと、主としてオーストリア=ハンガリーとロシアに向かいまし、ほとんど同数のラビたちは、西ヨーロッパに向かったのです。

ここで私が申し上げたいのは、解放期のラビたちの間には、文化的な経歴にせよ、宗教的な潮流にせよ、あるいは移民のパターンにせよ、共通の(あるいは主たる)ものは何もないのだということです。一方で、しかし彼らのすべては、モダン化の中でドイツのラビ組織がもっていた相対的な優位に対して反応を示していました。幾人かのラビたちが、彼らが作り出した文化的な総合を海外で広めようとする一方、他のラビたちは反対にその一部となることを逃れるべくドイツを離れたのです。

専門職業化とモダン化が、移民との間に持つつながりを認識するために、まず念頭に置かなければならないのは、ラビたちの文化的な適応はフラ

ンスでなされたように神学院での修練を通じてなされたのではない、ということです。モダンなドイツ・ラビの修練はひとつの枠組みでなされたものではありません。それはイェシヴァから大学にいたるまで、異なった起源をもつカリキュラムを積み重ねるだけでした。それはまた文化間の、また一定程度、空間的な移住がもたらしたものでした。理念型としては、モダンなラビ学者は「ドクター・ラビ」になるものと思われていました。つまり、タルムード的な権威によるラビの叙任と、人文学の博士号を獲得した学者です。「ドクター・ラビ」は、特殊ドイツ的、オーストリア＝ハンガリー的な現象です。そうした文化的な経歴を持つラビは、東欧にはさほど現れませんでした。東欧では、ユダヤ人たちが笑いながらこう言っていたのです。そんなに多くのドクターが必要なことから、ドイツのユダヤ教が病んでいるのは明らかだ、と。

異なった機関で修練を積むことで、「ドクター・ラビ」は隔たった学問空間や共同体を往還しなければなりません。こうした取り組みの知的かつ象徴的なものは、最初にドクター・ラビとなったアブラハム・ヴォルフが、ヴェルツブルクでの最初のセメスターを過ごしたところに体现されています。ヨハン・ヤーコブ・ヴァグナーの哲学の授業が終わり、学生たちがヴェルツブルク大学の外に蟠集している午後、若きユダヤ教神学者は右に折れてメイン川の方へへ行かねばなりません。彼はフランシスコ会広場、修道会通り、ウルスラ会通り、アウグスティノ会通り、聖堂通り、カルメル会通りといった街並みを下っていきました。このカトリック的な通りの名前が告げているのは、この町はユダヤ教徒ヴォルフのような人々をそもそも念頭に置いていない、ということです。中世以来の追放令がしぶしぶ撤回されてから、10年も経過していませんでした。橋にさしかかる直前で、彼はケルナー通りのとある邸宅に入りました。そこではまだ若い共同体の、年老いたラビ、アブラハム・ビングが、生徒たちの真ん中で彼を待ち受けていました。タルムードの授業がようやく始まるのです。

ヴォルフのたどった道のりは若者にとっては短い散歩のようなものですが、ラビ文化にとっては前例のない旅路です。三年前、1816年にマインツ

出身のイザーク・ベルナイスとカールスルーエ出身のヤーコブ・エトリンガーが史上はじめて修士号をとり、後にすべてのモダン・ラビの必須項目となった学問的であると同時にラビ的な修練を事実上発明したのです。1819年4月にヴォルフが彼らに加わり、急ごしらえの学問的カリキュラムにおいて公式に入学した最初のラビ候補生になりました。このカリキュラムは、諸学の全般的な研究、相当程度の東方文献学、そしてヴァグナーの哲学的ロマン主義などから構成されていました。ヴァグナーの哲学は、シェリングの薫陶を受け、あらゆる時代と信仰の宗教的象徴の解釈を追求するものでした。午後はラビ・ビングによるタルムードの議論とマイモニデスの教条の授業にあてられました。ラビ・ビングはフランクフルトやオッフェンバッハのカバリスト・サークルのなかで育ってきたのですが、おおよくの授業においては、こうした痕跡はほとんど認めることができません。カトリック的な街並みを通るラビ学生の道のりは、知的冒険心以上のものを要求します。1819年には、悪名高いヴェルツブルクのポグロムが勃発し、ラビ・ビングと彼の学生たちはしばらく郊外に逃れなければなりません。

ヴォルフはやがてネオ・オーソドクスを代表する人々の一人となります。ユダヤ教の教えを、モダン的な形ではあれ純粋な状態で伝承しようとするのではなく、その時代の政治的原則や理性の原則に合わせていかなければならないと考える人々に対して、彼は論争を挑みました。こうすることで、彼は彼自身の教育上の「移住」を、独自の文化的総合に落とし込むことができたのです。彼は後年、それを次のようにまとめています。「ユダヤ人たるもの、自らが人間のあらゆる知の特性に精通し、学問からはあらゆる利点を喜んで取り込み、それらを中心から発展させるべく貢献するのが、と示さねばならない。それでも彼は、永遠の生を持つ太古のユダヤ教の精神に自らが満たされていることを常にしめすだろう。」ロマン主義者であったヴォルフは、普遍的な志向と特殊的な志向のあいだに何らの矛盾も感じてはいませんでした。むしろ両者のあいだに深い親和性があると感じていたのです。「すべての人間集団の至高の産物は、彼らの本性が持つもっとも特異で特徴的な力

によって花開くのだ」と彼は信じていました。

ギーゼン大学で聖書文献学の博士号を得た後、1824年に、ヴォルフはラビの叙任と博士号とを結合した初めての人物になりました。その後の一世紀の間、ドイツから中欧にかけて現れたおよそ二千人の「ドクター・ラビ」たちの権威は、この象徴的な二重の資格に基づくものになりました。1829年、彼はコペンハーゲンにおいてデンマークの首席ラビとして招聘され、デンマークの公式人物伝によれば「デンマーク・ユダヤ人の歴史の新しい時代」を切り開いたのです。

デンマーク語によるユダヤ教説教が一人のドイツ人に起源を持つとすれば、ドイツ語におけるユダヤ教説教は、一人のデンマーク人によって著名なものとなりました。ヴォルフがその画期的な旅を成し遂げた頃、コペンハーゲン出身のイザーク・ノア・マンハイマーはウィーンにおいてドイツ語によるユダヤ教説教を刷新していました。彼は自らをラビとは見なしてはいない、と強調していましたが、宗教文化に関わる事柄で彼が持っていた権威は、同時代のラビたちのほとんどを上回るものでした。彼は学問的に訓練された一方で、宗教的かつ美的に振る舞う説教者の原型でしたが、それはちょうど「ドクター・ラビ」のように、同世代の西欧のラビたち全体にとって、一つの規範的な役割を演じました。1829年当時、ヴォルフとマンハイマーは彼らの計画や経験したことについて私的に文通するだけでしたが、このやり取りは1830年代半ばには公けにされ、鉄道と輪転機、そして宗派ごとに発行する新聞に助けられて国境を越えた反響を呼ぶことになりました。

モダンなラビ制度の発端当初から、文化的・制度的な変化は地理的な移動と広範囲のコミュニケーションにかくも内在的に結びついていました。南ドイツからバルト海沿岸地方に向けてのヴォルフの旅は、大学とイエシヴァをつなぐ以前からの都市的な接続なしには生じなかったでしょう。あるいは、彼の出身地のヘッセン大公国ダルムシュタットからバイエルンへの、学問的な理由による移住なしには。ラビ・ビングの学生の半分は、ベルナイスやビング自身と同様に、バイエルン出身ではなく、学習を終えた際には再移住する準備ができていた移民でした。改革派は論争の際に、ヴ

ェルツブルク学派の構成員たちに移民というレッテルを貼って蔑んだりしたものです。イザーク・ベルナイスはフルトの改革派、エルカン・ヘンレによって、「ラインからエルベに移送中の商品」などと呼ばれました。コペンハーゲンにアブラム・ヴォルフが招聘されたことに関わり、ゴットホルト・ザロモンはマンハイマーに「ヴェルツブルクの神秘主義で養われ、ユダヤ的なものをキリスト教のシュトゥス[טוטש; イディッシュ語で「馬鹿げたこと」の意]と混ぜ合わせたこの[渡り]鳥たち」に対する軽蔑を表明したのです。

ヴォルフのさまざまな移住の試みは、異なった動機に基づくものです。良い教育を求め、諸文化の間を移動し、職業的なキャリアを追求しつつ、迫害から逃れて場所を移し、程よい宗教的な環境を求め——彼の旅路は、今日の移民論の主張のひとつを体現するものでしょう。つまり、移民とは異常な出来事として記述はできない。それは人間生活における共通の事実である、それは自発的な要素と不本意な要素とを常に含んでいる、そしてどんな短い移動も、長い旅路の始まり、ないしは本番前のリハーサルとみなすことができる、といったものです。

しかし、こうした一般化には限界があります。人間は本性上、定住するわけでないというのは確かであるにせよ、やはり本性から移民であるというわけでもないのです。モダンなラビ制度は様々な尺度の移住へと導いてゆく社会的かつ文化的な条件を承知していました。極端な保守派であれ、モダニストであれ、ドイツのラビの系譜を振り返ると、ほとんどの場合で地域的に長らく安定していた系譜が、移住を主とする系譜に置き換わっていることがわかります。19世紀の初頭には多くのマスキリームのラビたちが旅路をとっているのですが、それに劣らぬ数の伝統主義者たちが移動していることも見て取れるでしょう。その筆頭としては、例えばモーゼス・ソフェルがいます。幾人かのマスキリームのラビたちは、否応なく定住しなければなりません。この時期のもっとも革新的なラビのひとり、イザーク・アレクサンダーは、ドイツ語でユダヤ教神学の著書を最初に著した人物ですけれども、彼の人生のほとんどすべてを、出身地のレーゲンスブルクで過ごしました。

一方、オーソドックスの筆頭、モーゼス・ソフェルは、フランクフルトに生まれていますが、複雑な学問的キャリアをたどったのち、最後にはドナウ川沿いに広がる帝国へとたどり着きました。そこでは、彼は自らの移民としての立場をはっきりと示し、「フランクフルト・アム・マイン出身のモーゼス・ソフェル」と署名をするのが常だったのです。

つまり、ラビたちにとってのモダニティのなかでは、移民とは規範的でもなければ、例外的でもないのです。むしろ私たちは、この現象をとりわけダイナミックなコンテクストに帰すべきです。それが生じたのは、学問的に訓練されたラビというドイツ・モデルが、変則的かつ通時的に拡張してゆく過程に対する応答のなかでした。1820年代から1850年代にかけて、このドイツ・モデルは他のユダヤ文化に到達し、そして最も広範囲での受容期を迎えたのです。

2. 北西ヨーロッパにおけるドイツ式の人物の一般像

解放期にドイツ国外で地位を得たラビたちのなかで、圧倒的多数を占めたのはバイエルン出身者たちで、その数は35人を下りません。この集団は、ドイツからのユダヤ移民に結びつく一般的な政治的・経済的なプッシュ要因を超えて、特別な状況を共有していました。タルムードを学ぶ学生のあまりに多くが、モダンなユダヤ神学者にならざるをえず、結果として1830年代にはラビ候補生の供給過剰があらわになってきたのです。相当程度の候補生の過剰は、彼らがドイツのいたるところで、さらにはパリやウィーン、ミラノなどで、家庭教師という惨めな地位を引き受けることによって解消されました。長距離の移住は近隣のドイツ諸邦、ならびにフランスやイタリアでとられた現地出身者優先のポリシーによって促進されることになりました。そうしたところではラビ神学校が機能しており、また保護法もあったため、ドイツの候補生たちは遠ざけられたのです。例外的には、文化的に最大限適応した共同体が、旧フランスやオーストリア領出身の候補生たちを選ぶということもありました。プファルツのランダウ出身の従兄弟、ダフィートおよびザムエル・マルクスは、それぞ

れメッツの神学校で学んだ後、1837年にボルドーの、1842年にバイヨンヌのコンシストワールの首席ラビになりました。ボーデン湖のほとりのランデグ出身者、マイアー・ランデッガーは、スイス、ハンガリー、オーストリアを経て、トリエステのラビたちの間にオーストリア人として入りました。ドイツにいる義理の息子に微妙な言い回しで書き送ったところによれば、ランデッガーは「永住、軍務、そして職業的な参与という点ではイタリア人とみなされねばならない。しかし、出身地、教育、そして自己同一化という点ではドイツ・ユダヤ社会に属している」といいます。

一方で、北海沿岸の諸都市はアシュケナージ・ラビの通常の移住パターンに対しては開かれていました。つまり、ヘッセンやフランケン、ポーゼンやモラヴィアといった、貧しいけれども学識と伝統のある地方で育った若い学者が、宗教的インフラを整備する必要がある成長中の都市の共同体に招かれるといったパターンです。イザーク・ベルナイスのハンブルクのラビ制度への任命が話題となり、彼がシナゴグや学校の刷新に成功して以来、ヴェルツブルク学派の新しいオーソドックスは北方の都市共同体に求められるようになりました。1832年、アンハルト出身の学校教師カール・ハイネマンの任命によって、スウェーデンは初めての学問的訓練をつんだラビを得ることになりました。一方で、ベルギーは1834年にヴェルツブルク学派出身の候補生、ハインリヒ・レープを首席ラビとして招聘します。1834年にはデンマーク領のシュレスヴィヒホルスタインがエトリンガーをアルトナの首席ラビとすることでこれに続き、イギリスは1844年にハノーファー出身のナタン・アードラーを首席ラビに据えます。ナタン・アードラーはヴェルツブルク式のモダン・オーソドックスの方向性を、二、三の例外を除いてイギリス中のシナゴグに浸透させることに成功しています。「はなはだしい見解の相違」が見られた時代に雇われたアードラーは、伝統主義者もモダニストも従うことのできる道を提示したのです。ユーリウス・カルレバッハは「中道派のオーソドックスはイギリス・ユダヤ社会の特質であり、おそらくユダヤ共同体から出てきたのはほとんど概念的な論争だけだったのではないか」と結論するにまで

至っています。

西欧諸国においてユダヤ教改革運動はさほど支持を得なかったために、そこで任命されたドイツのラビたちは、わずかな例外を除けば、宗教的路線としてモダン・オーソドックスの道をたどっていきました。ルクセンブルクは大公の個人的な好みによってドイツの改革強硬派のザームエル・ヒルシュをラビたちのなかに招きました。グスタフ・ゴットハイルはイギリスの首席ラビ、ナタン・アードラーの排他性に対抗して、1860年に自らをマンチェスターのラビに任命しましたが、これらは例外的な事例です。

エトリンガーのマンハイムからアルトナへの移民が示しているように、モダン化を進める南ドイツのユダヤ人の拠点、フルトやマンハイム、カールスルーエといった都市は、文化の変容にとっては周縁的な北方へと、比較的伝統的なラビ候補生を追い出しました。言語的に彼らが適応していくには時間がかかりましたが、ヴェルツブルクのオーソドックスによって体现された柔軟な文化的総合は、デンマークやイギリス、そしてその他の国外のユダヤ人が抱えていたモダン化の問題に対する適切な回答であるとわかったのです。こうした総合は、当時はドイツそのものより、非ドイツ的な環境にこそ適していたのかもしれませんが。こうした地域には、いずれにせよ改革を志向する教師や説教師、思想家たちが入り込んでいました。しかし、「ドクター・ラビ」はそれが現れた特殊な歴史的布置のおかげで、明確にドイツ的なものとして理解できるでしょう。解放期の差別によって、ドイツのラビ候補生は妥協的な総合を拒絶せざるをえませんでしたし、二つの文化的・言語的体系に同時かつ完全に身をさらしながら、その間を自由に往還できることを志向せざるをえませんでした。彼らが打ち出した普遍主義的な要求、彼らの「人類の知のすべての特性を包括する」ことへの熱望、そして彼らの伝統へのロマン主義的な関心が、彼らを他国のユダヤ社会の文化的環境に引き込むことを可能にしたのです。しかし、これから見るように、必要な文化的・言語的適応が欠けた場合には、その問題含みのドイツ性によって、この魅力的なモデルが妥協的なものになる危険が常に存在していました。

3. 古いオーソドックスの避難民

ハスカラーの教育改革の大半が都市で始まった当時、地方のラビ学生は通常、ユダヤ教の学習に関して優位を持っていました。それは彼らの貧しい経済状況と均衡をとるものでもありました。モダニズムの路線を共有する限りで、若いラビたちは彼らにとって物質的には有利な、しかし文化的には不利な都市の環境に身を移すことができました。伝統主義者は、反対に高い連続性のある場所を目的地として探しました。この集団のなかでも、最も意欲的な人々のうち幾人かは、潮流に逆らって都市に踵を返し、郊外へ、そして西から東へと移動していきました。ケーニヒスベルクのラビ、ヨシユア・ヘルツベルクのケースはよく知られています。彼は彼の共同体が啓蒙され、儀礼について彼に助言を求めなくなったために、クロトシンの伝統的共同体へと移住したと伝えられています。こうしたモダンからの避難民の最初の例は、フランクフルト出身のナタン・アードラーでしょう。彼の周りに集まる神秘的サークルのために共同体の指導者たちが対立するのを避けるべく、彼は一時的にモラヴィアのラビの地位を受け、彼の弟子であったモーゼス・ソフェルを連れていきました。モダンな政治についてのモーゼス・ソフェルの鋭敏な感覚は、彼の同時代人によれば、西欧的な背景によるものだというのですが、彼はイデオロギー的な理由によってドイツを離れたのではありません。というのも、彼は1821年にフルトのラビのグループへの招聘についての交渉にはいったことが分かっているのですから。プレスブルクの首席ラビ、そしてイエシヴァの学頭として、しかしながら彼はドイツを逃れて東方に避難地を見出そうとする超伝統派のラビ学生の規範となり、また保護者となりました。フルトのイエシヴァが1824年に国家改革によって最初に閉鎖されると、その上級生であったナタン・ヴォルフ・リーバーはプレスブルクへと逃れ、妻によって養われる私学者にしてカバリストになりました。家庭では、伝統的なユダヤの生活を営んでいましたけれども、それは新しいバイエルンの法によってはほとんど許されないものでした。彼の律法についての授業

はフランケン地方のオーソドックスの連鎖的な移民を生じさせました。彼らは大学に戻って勉強をする前に、プレスブルクの彼のもとで学ぼうとしていたのです。

ヨーロッパに新しい故郷を探す改革主義者を力強く拒絶する一方、ソフェルの学派は父祖が住まったイスラエルの土地とのつながりを強調しました。彼のイエシヴァの構成員の幾人かには、政治的な洞察力があり、ムハンマド・アリ・パシャのエジプト軍が、オスマン帝国からパレスチナの統治権をもぎ取ったことで現れてきたユダヤ人移住の歴史的機会に気づいていました。ちょうど同年、プレスブルクのドイツ・ラビ移民の一人、テューリンゲン出身のモーゼス・ザックスは、エルサレムへと旅立ち、最終的には聖地におけるユダヤ人の農業居住区を最初に計画することになりました。北部ハンガリーと南ドイツのオーソドックスのネットワークのなかで喧伝されることで、プロト・シオニスト的な発想がアブラハム・ビングのお気に入りの弟子、エリエゼル・ベルクマンをも捉えています。このフランケン人は、彼の師の学校を著名なものとした大学での勉強を拒絶するのが常でした。彼は同行者を探してドイツじゅうを旅して失敗したのち、1834年に家族とともにエルサレムへと旅立ちます。ザックスとベルクマン、そしてその他のアシュケナージ移民は、エルサレムでオランダおよびドイツ出身のユダヤ人からなる、「コレル・ホード」と呼ばれるタルムード学習の同胞協会を設立しました。コレル・ホードの名前は二つのヨーロッパの国を掲げていますがそれでも [Hod は Holland および Deutsch の頭文字]、そのメンバーは中東風の衣服をまとい、セファルディ式のヘブライ語、ラディーノ語、アラビア語を、彼らの母語であるドイツ方言とともに用いていました。

ベルクマンのバイエルンでの友人は、反モダンの対抗潮流に身を投じました。ラツァルス・オツテンゾーサーとダーフィット・ヴァイスコプフも移民することを選択し、バイエルンの片田舎の小さな共同体でのラビの職を退きました。ヴァイスコプフの息子、モーゼス・ヴァイスコプフは彼自身の小さな隠れ家を見つけ出します。1858年、彼はパリにある「シャス・ヘブレ」ないし「タルムー

ド研究協会」のラビとなりました。これは厳しい宗教生活を維持し、コンシストワールに対して反抗する敬虔なユダヤ人たちが作った分派の共同体でした。

1839年、フルトのイエシヴァの最後の学頭であったヴォルフ・ハンブルガーは、バイエルンの法律の重圧に直面し、勉学を捨てて商業に身を投じざるをえなかった彼の敬虔な弟子たちの苦難を記録に残しています。プレスブルクやエルサレム、フランケンの小さな村落に、あるいは大都市の共同体の周縁部に引きこもらなかったオーソドックスたちは、伝統的な生活様式を守ることのできる自由を与えてくれそうなもう一つの目的地に期待をかけるようになります。彼らは「海を越えた遠くの土地に行き、聖なる、そして純粋な会衆に交じってトーラーを教えたいと願っていた。」ハンブルガーが暗黙に示唆しているのは、とりわけアブラハム・ライスという、彼の学生のうちでも最も優れた学識者でしょう。彼のために、ハンブルガーは彼の著作を公刊し、渡航費用に必要な元手を集めようと決めたのです。1840年にバルティモアに到着したライスは、叙任を受けたアメリカ最初のラビになりました。一方で、彼の同郷人であり、ハンブルガーの弟子であったイグナーツ・クンロイターは、シカゴにおいてラビのグループを創始することになります。

ライスとクンロイターという最初のアメリカのラビたちは、バイエルンからきたウルトラ・オーソドックスの避難民たちでした。新大陸についてすぐ、ユダヤ的な生活を統合しようという彼らの意向は、ヨーロッパのユダヤ教の対抗勢力と競合することになります。一方には、アイザック・リーサーのモダン・オーソドックスがあります。フィラデルフィアのセファルディ共同体「ミクヴェー・イスラエル」の説教壇に立つ、ヴェストファーレン出身の先駆的な説教師で会った彼は、聖書翻訳や時評、また近代的な共同体の制度を通じてアメリカ・ユダヤ教を育みました。ほとんど直後には、レーオ・メッツバッハーの改革派の動きが始まります。彼はフルトのオーソドックス的な環境で学び、さらにはプレスブルクのソフェルのイエシヴァで学びさえしたのですが、ニューヨークに1841年に到着して以降、彼は徐々にラディカルな改革

派の頭目となっていきました。

フルトから来たオーソドクス移民は、新大陸をフランケン地方のような片田舎に「聖なる、純粋な会衆」が散らばっていると思い描いたという点で誤っていただけではありません。彼らはまた、そこを雇用の場とみなしていた点でも誤っていました。当時のアメリカは、ユダヤ教の宗教職の雇用市場などなかったのです。ラビたちは頻繁に彼らの薄い給与を他の収入手段で賄わざるをえませんでしたし、彼らを支えてくれるだろう共同体や制度を、自ら作らねばなりませんでした。ライスやクンロイターによって代表される厳格なオーソドクスは、国のリベラルな精神とも衝突しましたし、また彼らと同様に移民してきた同郷人とも衝突したのです。ライスとクンロイターはまもなく職を失いましたが、フランケン地方のオーソドクス・ネットワークはハンブルガー自身が生きている間は機能し続けました。かつてのフルトのオーソドクスの最後の残滓は、文通によって存続していました。それはハンガリー、パレスチナ、アメリカという隔たった支部をつなぐ中心を保持していたのです。

4. サントペテルブルクとニューヨークの間の中央集権化の課題

アブラハム・ヴォルフによるデンマーク・ユダヤ教生活の整った再組織化は、1840年代にドイツから移民するラビたちの体系的な定住の試みの青写真となりました。ロシア、イギリス、そしてオーストリア帝国においても、またアメリカにおいても、ドイツの移民ラビたちは宗教的問題に関する統一機構を設立しようと、しばらくの間は挑戦したのです。

イギリスにおけるこの種の特殊な制度創設の成功について、さきほど言及しましたがけれども、今度はオーストリア・ハンガリー君主制のもっとも強力なラビ制度におけるその模倣の失敗に立ち返ってみましょう。つまり、モラヴィアの首席ラビです。1848年にその任命のプロセスが始まったとき、モラヴィアの人々は初めからドイツに期待をかけ、宗教的無関心と超伝統主義とを打ち倒すことのできる、合意された候補者を探しました。結果的に選ばれたのは、ネオ・オーソドクスの指導

者、ザムズーン・ラーファエル・ヒルシュです。

ドイツの支援への期待は、小さな、半非合法のマイノリティとしての東ヨーロッパ近代主義者たちの最後の希望でした。ポーゼン地方においては、1841年に「ドイツ・ラビ」がようやく表れましたけれども、それでも尋常でない混乱を引き起こしました。ロシアにおけるドイツ・ラビの影響は1838年秋から見られます。リガの共同体の代表者たちが、「[初等教育校の] 校長」という地位を設け（これは、マンハイマーがウィーンで公式に就いていた職位です）、そこに「ヘブライの信仰を持つ外国人」を据えることを決定したのです。バイエルンの若い候補者、マックス・リリーエンタールは、ルードヴィヒ・フィリップゾンの推薦を得て1840年1月にその職に就きました。彼の情熱は、彼に割り当てられた地域的な仕事をはるかに越えていきました。サントペテルブルクでのセルゲイ・ウヴァロフとの会合は、1841年、リリーエンタールによるロシア・ユダヤ人学校の改革という壮大なプロジェクトに帰着します。ウヴァロフはさらに、「ドイツの非常に著名なユダヤ人」たちを教師として大量雇用することさえ提案しました。ドイツのユダヤ誌はロシアじゅうを旅するリリーエンタールを、当地の報告者からの投稿を通じて詳細に追跡しました。オデッサでは、新しいラビは「より良き世界から来た友好の星」とみなされました。モルダヴィア地方、キシニョフの報告者は「宗教的な分野において、一定の改革と、常なる癒しと永遠の変容を引き起こす、これらの際立った知性を供給する役割は、ドイツに割り当てられている」と考えていました。ヴォルニアのベルディチェフのように、ハシディズムの影響が強い地域では、外科医であった報告者がリリーエンタールの到着を、「光と闇との闘争」への英雄的な介入として描き出しています。彼はロシアのツァーリへのおべっかをこめて、「使命」という言葉をあらゆる文中にちりばめています。こうしたラビの雇用は、模倣を生みました。新しいリガの説教師の振る舞いに刺激を受け、隣接するミタウの共同体も、「ドイツ出身のラビ」を独自に招聘することを決めました。リリーエンタールはロシア・ユダヤ人の宗教的・国民的な「教養」を高めることを、本心から推進していたのです。しかし、オーソド

クスの仲間のかたくなさと、ロシア政府の改宗への志向を感じるようになると、彼はその仕事に希望を失い、1844年、突然アメリカへと渡ってしまいました。

そこでは、彼の中央集権化の試みの新しい段階が待っていました。1845年12月28日、アメリカについてまもなくのことです。リリーエンタールは、ニューヨークの三つのドイツ・ユダヤ人共同体のラビに選任されました。年少の同僚が、そこに一度に加わります。ヴェストファーレン出身のジェームス〔ドイツ名：ヤーコプ・コッペル〕・グートハイムと、イザーク・ヴァイス、後のアイザック・マイヤー・ワイズが、同じ年の6月に、「暗い夜がまだまだたれこめている」ボヘミアの抑圧的な空気をのがれてやってきました。ワイズは二人のバイエルン人、リリーエンタールとメルツバッハーの家で、心からの歓迎を受け、ともに進歩的な理念への忠誠を誓ったのです。彼にとっての決定的な瞬間は、リリーエンタールのドアを最初に叩いたその瞬間でした。「振り返りながら、彼は親しみを込めて、心からシャローム・アレイヘムと言ったのです。『頭をあげて、勇気を持って！』と彼は叫びました。『君はひとかどの人物で、私たちは君を必要としているのだ』と。」リリーエンタールの反応は、1846年当時のアメリカのラビの学識がまだ小さなものであったことを思えば、よりよくわかるでしょう。「リリーエンタールとメルツバッハーの他には、発音記号なしのヘブライ語を読める指導者などいなかった」のです。

1846年10月、リリーエンタールはフェルト出身の同窓生、ヘルマン・フェルゼンフェルトとヘルマン・コールマイヤーとともに、アメリカ全土を包括するラビ法廷を立ち上げようとしていました。コールマイヤーはその後まもなく、ニューオリンズへと移住し、彼の地位をワイズに譲ります。このサークルの結束は、必ずしも改革派のイデオロギーに関連付けて根拠づけなくてもいいでしょう。リリーエンタールは、ワイズによれば、アメリカに就いたころは「まだ保守的」だったといいます。彼の慎重な宗教的態度、そして戦略的な位置取りは、豊かで権力もある共同体の長老たちと彼が結びついていたことに主として由来します。こうした結びつきが、一時的にせよ、彼がロシアにおい

てなろうとした中心的な人物へと彼を押し上げたのです。1847年だけで、彼は15人のラビと説教師をアメリカの東海岸各地で任命しました。1848年の春には、宗教職の新しい労働市場があるという噂が、ラビや説教師の移民の新しい波を呼び寄せました。しかしリリーエンタールが書いているように、多くの者は空疎な期待を抱いただけでした。共同体内部での地位は当初のペースでは増えていきませんでしたし、当時あったのはあくまで暫定的な地位でした。共同体はしばしば、より適当な人材が渡航してくることを当て込んで、典礼朗唱者やラビを雇用した翌年には解雇していました。リリーエンタールは、ニューヨークにあった彼の応接間に才能ある説教師の悲嘆の音が鳴り響いたのは一度きりではない、と認めています。職を失った（あるいは見つけられなかった）彼らには荷物をまとめて行商に出る以外に選択肢がなかったのです。「これらの人々のうち一人は靴屋を開き、別のものは葉巻の製造を習っている。また別の者は本の装丁を。その他は事務員になったままだ。」

リリーエンタールのアメリカ・ラビ裁判所は一過性のものでした。1848年の革命後に移民ラビの一団が新たに到着した時には、彼の居室でラビの地位が割り振られることなどありませんでした。郵便と電信事業の普及によって、アメリカのユダヤ共同体は旧世界の著名な候補者に、直接労働条件を提示することができるようになったのです。アブラハム・ガイガーは待遇の良い地位を二回にわたって拒否しています。1849年6月、ニューヨークでの説教師の地位がドイツのユダヤ系新聞で募集された時、新しい雇用の様式が生まれたと言えるでしょう。それはすぐに規範的なものになりました。トランスナショナルなラビの労働市場が生まれたのです。それは未だかつてなく自由なもので、地理的な差異を払拭するものでしたが、一方でイデオロギー的にはより極端なものになっていきます。

5. 1848年以降のグローバルな労働市場

1848年の革命から1854年のブレスラウ・ラビ神学校の開設までの間、ラビを訓練するための制度はほとんどドイツ全土で没落しました。タルム

ードの学習が生き残ったのは、ボヘミアやモラヴィア、北ハンガリーの幾つかの拠点と、田舎にある幾つかの厳格なオーソドックスのイエシヴァだけでした。ラビになろうという学生たちの失業危機から20年を経て、彼らの数は劇的に少なくなりました。皮肉なことに、未だ残っていた候補者たちは、西にはアメリカへ、東にはオーストリア＝ハンガリーへ、国境をまたいで広がった就労機会を捉えることができました。

アメリカ合衆国では、ドイツ・ユダヤのラビたちを受け入れたのは、ニューヨークやボルティモア、フィラデルフィアのような東海岸だけではありません。アルバーニー、バッファロー、ロチェスター、シラキュースのようなニューヨーク州北部、シンシナティ、コロンバス、クリーヴランドといったオハイオ州、中西部ではシカゴ、デトロイト、セントルイス、南部ではチャールストン、ルイヴィル、モビール、ニューオリンズにも、彼らやってきました。西部では、サンフランシスコがドイツ改革派のラビを1854年に受け入れています。ポートランドやオレゴンといった遠くの場所でさえ、ドイツの週刊誌にユダヤの精神的指導者を求める広告を掲げました。17人のバイエルンのラビたちが、解放期にアメリカ合衆国にわたっています。同様の数が、ポーゼンやシュレージェンから、8人がドイツ中西部から移民しています。1840年代の移民、またそして1849年の反動を逃れてきた移民は、通常、穏健な改革派です。これに対して、この運動のラディカルで強硬な人物たちは、1850年代に（例えば、ダーフィット・アイヒホルン）、あるいは南北戦争後の60年代に（例えばカウフマン・コーラー）到着しています。

ドイツ・ラビ文化への新しい需要は、ヨーロッパでも同時に高まってきました。スイスの最初の近代的ラビ、ボン出身のオーソドックス、レオン・アウエルバッハは1850年にやってきました。近代化の猛攻に対して長らく砦のように抵抗してきたオランダのラビたちは、1850年代初頭に陥落し、フローニンゲン、マーストリヒト、ロッテルダム、ズヴォレという四つの大きな共同体で学問的訓練を受けたラビを雇用しています。この成功を受けて、ドイツのユダヤ系新聞はモラヴィアやガリツィアも続けと主張しました。すでに見たように、

東・中欧でのラビ制度のドイツ化は、オーストリア＝ハンガリー帝国においては、都市部のユダヤ人たちの独立した改革共同体のもとで始まっていました。彼らはマンハイマーのウィーン「テンプル」のモデルに、あるいは公式には「イスラエル信仰改善協会」を名乗っていたプラハのアルトシユール共同体のモデルに習っていました。1835年から1890年までの間、この協会で働いていた3人の説教師——レオポルト・ツンツ、ミヒャエル・ザックス、ザウル・イザーク・ケンプフ——は全て、プロイセンから招聘されました。ペストの「コールシューレ」も、リヴィウの「テンプル」も、革命のずっと以前からマンハイマーの儀礼上の改革を模していました。1848年、超伝統派が説教師アブラハム・コーンに対して決定的な打撃を与えようと計画しましたが、ドイツ人を説教師にするという伝統は、リヴィウでは第一次世界大戦まで続いたのです。

より重要なのは、オーストリア＝ハンガリーの主要な共同体が、民族分離派を押さえつける新絶対主義的な反動体制下で、ドイツの候補生に目を向けたことです。1850年代から1860年代を通じて、行政的・言語的な統一の試みは帝国全土をドイツ語圏の国々へと近づけました。トランシルヴァニアでさえ、ドイツ語での説教が要請されたのです。ドイツの北西部から来るラビには、とりわけ高い需要がありました。純粋な標準言語と結びついたアクセントでの発話に加え、彼らは幼少期からギムナジウムに通い、成熟した、学問的で一般に認知された形でのラビ文化へのアプローチ獲得した特定の方の候補者を提示していました。1847年、モラヴィアの首席ラビとしてニコルスブルクへ招聘された、ハンブルク生まれのザムゾン・ラーファエル・ヒルシュはその好例といえるでしょう。エズリエル・ヒルデスハイマーはハルバーシュタットに生まれ、アルトナで教育を受けましたが、ヒルシュに続いて1851年にアイゼンシュタットの共同体のラビとなります。ヴォルフ・A・マイゼルの両親はボヘミア出身ですが、彼自身は同様にハンブルクで育ち、シュテッティンでラビとして活動したのち、プラハとウィーンでの地位を探し、最終的には1859年にペストの大シナゴグへ招聘されました。ヒルデスハイム出身の

モーリツ・ギューデマンは、1862年にブレスラウ・ラビ神学校の最初の卒業生の一人として学業を終えています。彼はラビになるための訓練のすべてをそこで済ませたのです。そしてその直後、彼はウィーンのラビ(後に首席ラビ)になります。1864年から1872年にかけて、ヘッセンやリッペの北部から来た候補生たちは、プラハ、ピルゼン、カールスバードのラビ制度を席卷しました。ボヘミアやモラヴィアの小さな共同体は、ドイツ語を話すラビの需要を自らの地域の出身者で満たしましたが、いくつかの新しく設立された都市部のシナゴグは、国境を越え、北のアクセントを持つ説教化を探し求めました。12年に満たない間に、シュレーゲン出身のザームエル・ミューザムは、ポステルベルク、ザーツ、ビゼンツ、グラーツの職位を歴任しました。ハノーファーもまたハンガリーのラビを輩出しました。1875年、マイゼルの後を襲ってブダペストの説教壇に立ったマイアー・カイザーリングは、移民する以前にはプラハで学び、スイスでラビとして活動をしていました。

国境を超えた労働市場は、ドイツのネオ・オーソドックスの利益にもなりました。一時的にはありますが、その主たる指導者は二人ともドナウ川沿いの帝国にいたのです。ザムゾーン・ラーフェエル・ヒルシュにとって、モラヴィアの首席ラビへの招聘は、移民戦略の成功と呼ぶべきものでした。彼はアムステルダム、ポズナン、そして出身地のハンブルクのラビ制度ではなく、ロンドンかモラヴィアを望ましい土地だと考えていたのです。彼は移民先で地域学派を組織しようとしただけでなく、また出生地のドイツからまとまった賛同者を引き連れてきました。ハインリヒ・グレーツは、エムデンでの彼の私的な弟子でしたが、当時計画されていたモラヴィアのラビ神学校で教職に就くことを期待して、1849年にニコラスブルクについてきました。1850年9月には、彼はルンデンベブルク(ブジュツラフ)近郊のユダヤ人学校の校長になりますが、一年後、文化的適応を遂げたヒルシュのユダヤ教がモラヴィア・ユダヤ人の穏健な敬虔さや学習方法と衝突した際にそこを離れます。しかし、モラヴィアで仕事をしている間、グレーツはむしろ独立して活動していたというべ

きでしょう。彼はモラヴィア・ユダヤ人と対立していたレオポルト・レーヴのためにも労力を割いています。ハンガリーでラビの地位を得られるのではないかと、という期待のため、グレーツはレーヴを、「原理に基づいて決断のできる人物、ロマン主義的な冗長さが鮮度をうしなっていて発酵しているところからではなく、純化された学問という新鮮な源泉から、自らの確信を引き出せる人物」とおべっか交じりに評価します。

ヒルシュの側に立ってより熱心に取り組んだのは、ヒルシュの弟子であり、また義理の息子でもあったアウグスブルク出身のヨーゼフ・グッゲンハイマーです。彼は1853年以降、モラヴィアとハンガリーの様々な共同体でラビを歴任し、最終的には、ボヘミアの田舎町、コリンで尊敬を集める精神的指導者となりました。コリンからアメリカに移民したオーソドックスのラビ、バルナルド・イローヴィは、グッゲンハイマーが「安息日に煙草を吸うことが啓蒙だとまだみなされていない」彼の故郷に職を得たことを祝福しています。オーストリア＝ハンガリー帝国の宗教的な生活様式は、バイエルンの片田舎の、移民者を多数輩出してきた小さな町からの様々な移民をさらに呼び込みました。ニコルスブルクでヒルシュの後を襲ったマイアー・フォイトヴァングもその一人です。エズリエル・ヒルデスハイマーもドイツからハンガリーへ、追随する者を呼び込もうとしました。アイゼンシュタットからデュッセルドルフの友人へあてた手紙で、彼は中欧におけるオーソドックスのラビの地位の可能性を売り込んでいます。「ここにはまだトーラーがありますし、トーラーに対する尊敬もあります。ここにはまだ本当のユダヤ人の生活があり、多くの共同体が尊敬をもって(犠牲を伴う尊敬です)ラビを支えています。それは、ひょっとしたらフランクフルトは違うかもしれませんが、ドイツのどこにも見いだせないような事例です。ここでは、トーラーを教え、イエシヴァを運営することができます。ここには、純粋な幸福に満ちた生活があるのです。」

ツァーリの帝国がドイツ人の流入を見せるのは、より短い期間に、より小さな規模で、幾つかの都市のシナゴグ協会に集中してのことです。ドイツ出身のラビは、リガのリベラルなラビ組織にお

いて、およそ半世紀にわたって、彼らの言語で説教をしました。オデッサの「ブロダー・シュール」においては25年間、ワルシャワのダニウオヴィチヨフスカ通りにあった進歩派のシナゴグにおいては、20年間です。一方では、プロイセン国境に近いいくつかのラビ組織は、ポーゼン地方の、比較的穏健なドイツ語話者のオーソドクスを、とりわけカリーシュ、ウェンチツァ、あるいはヨーゼフ・ハイマン・カロが1860年までヘブライ語とドイツ語で説教をしたヴウォツワヴェクとのような町に招聘しました。

1850年代を通じて、ドイツ語のユダヤ系新聞は黒海からアメリカ合衆国にいたる途方もなく広い地域のラビの地位を公示していました。ストックホルムのラビの地位は、1858年に世界的な指名キャンペーンによって公示されています。多くのラビ候補生が北欧や東欧に、あるいはアメリカの職に応募しています。幾人かのドイツのラビたち、マックス・リリーエンタールやダーフィット・アインホルン、マルクス・ヤストロフらは、東欧とアメリカ合衆国で続けざまに職を得ています。改革派のザームエル・アードラーは、年老いた母とともにいるためにリヴィウへの招聘を断ったのですが、1857年には新大陸に赴き、「リヴィウをニューヨークで、ガリツィアをアメリカで埋め合わせることができた」と喜んでいますが、ルードヴィヒ・レヴィゾーンはヴォルムスで年老いたラビの傍らで説教師として働くことになじみず、ウィーン、イェテボリ、ストックホルムでの職の提示を勘案したのち、採取的にはストックホルムに就職することになりました。彼の私的な文通は、彼の二人目の妻、フィリピーネが彼の学問的なネットワーク形成とキャリア・プランニングにかかわった際の熱心さを垣間見せてくれます。その様子を見ていた当時のオーソドクスの人々は、見知らぬ土地へ赴くことそのものが職業的な成功になってしまった、と憤慨しつつ指摘しています。ラビの候補生は、彼が新しい職で果たすべき宗教的な使命にはさほど関心を持たず、むしろ「肥沃な土地と健全な気候、ロマンティックな風景、魅力的なワインの産地、そして工業化された、裕福な人々」を発見することに気を取られているというのです。

6. トランスナショナルリティと秩序への希求

トランスナショナルなラビのキャリア・マーケットは、革命後の移民たちの多くがアメリカの岸を踏んだ、その精神とよく合います。1850年初頭、ルードヴィヒ・フィリップゾンが彼の新聞において、ボルティモアから来た一通の手紙を掲載しました。そのなかで、バイエルン政府の逮捕状から逃げ出したかつての革命派、ラビ・ハインリヒ・ホッホハイマーは出エジプトにも似た経験を言祝いで、こうのべています。それは「私の前に壮大に広がる、神の園のようなアメリカの岸辺を見たとき、神の自由な空気のなかに、私がもらった最初の、深い吐息」であり、「抑圧の中の抑圧、つまり一般的なドイツの抑圧のなかに詰め込まれた、ユダヤ人の抑圧を私がふるい落とした際の充足感」であった、と。しかし、こうした移民たちの心のなかでは、このアメリカへの熱狂は、旧世界での安全への希求とうまく共存できませんでした。ホッホハイマーは、バイエルンの無職のラビ候補生の一人でしたし、国を離れる際には、「確かな生活基盤を固める」ために必要な措置をとりました。これを彼はほとんど即座にやり遂げたのです。九年後、彼が唐突にヴュルテンブルクの管理下にある官僚化されたラビ組織に応募したとき、彼はそのことを明らかにしました。彼は次第に、彼が言うところの移民排斥的な民衆の支配に、つまりアメリカの民主主義に失望するようになった、と告白しています。そこでは「とりわけ、被害者が移民である場合には、卑劣な暗殺者が公然と前科がつくこともなく、彼の仕事を執行している」といいます。ホッホハイマーは、さらに故郷を思う彼の妻を慰める必要をも感じていました。

ドイツ生まれのラビたちは、とんでもない粗野な人々から支持を得れば、消防士であれ銀行員であれ、ラビとしての尊厳をどんな形であれ求めることができるという、アメリカの宗教政策にも不安を抱いていました。「ヨーロッパでは、教員補佐が荘厳なる称号を篡奪し、一群の宗教的蒙昧に支えられて権威を要求しても、そうしたひとが適格だとはみなされない」。ラビの仕事のグローバルな自由取引は、国家による管理および／あるいはハラハーによる規定をノスタルジックに思い起こす人々だけを動揺させたものではありません。アメリカ

カ・ラディカルな改革派ユダヤ教の父となったダーフィット・アインホルン以外に、こうした内的な矛盾をよく例示できる人物はいないでしょう。1838年を振り返るなら、バイエルンでラビの仕事を探していた彼は、学位に即してラビを雇用することを共同体に課す権威ある規定を発布するよう、政府に要求していました。1848年の革命ののち、彼がペストにおいて短命に終わった改革派共同体の説教師となったとき、彼は論争的な立場をとりました。彼の国家に対する要求のひとつにおいて、彼は彼をハンガリーへと導いた植民主義的な使命を攻撃的に表明しています。「かなりの物質的犠牲を払ってでも、ハンガリーの信徒たちの招聘に応じることは、私にとっては神聖な義務であると思われれます。そして、現在の宗教的な要請を理解することができない、ハシディズムと美的なエセ文化によって荒廃したこの国に、ドイツに由来するユダヤ教の神学的な研究成果を提供し、ユダヤ教を完全な周縁に導こうとする志向に競合することも。」アインホルンは、バイエルンやハプスブルクの抑圧的な文化政策と結託することを決めた時も、1855年にアメリカに到着して以降、意識の自由を称揚するときにおとらず熱心でした。彼の使命感においても、ドイツ出身者としての誇りの点でも、彼のヒエラルキー的な世界観ははっきりとし続けていました。例えば、1859年にアインホルンは次のように書いています。「ドイツの研究と知識とは、ユダヤ教改革の理念の源泉をなしている。ドイツ・ユダヤ社会は、これをアメリカの土壌において活性化させ、通用させるという使命を帯びている。」19世紀の最後まで、説教壇でドイツ語を用いることで、アインホルンやホッホハイマー、そして他の同世代人は、旧大陸における秩序だった世界への郷愁をあらわにしていたのです。

カウフマン・コーラーは、バイエルンのオーソドクスからラディカルな理性主義へと成長していった人物ですが、彼はニューヨークで密に組織された改革派サークルに到着した時のことを、25年前のワイズの経験と同じ言葉遣いで思い起こしています。リリーエンタールが彼に職を見つけ、アインホルンには彼の娘を妻としてめとらせた後、彼は「主が私を仲間の家に導いてくださった」と感じたといいます。1870年代まで、この家族的な

宗派は「ドイツの精神的指導」に服していたといえます。説教師やラビ、あるいは宗教学校の教師を指名する際には、ルードヴィヒ・フィリップゾンやアブラハム・ガイガーのような家長たちに助言を求めていたのです。若いドイツの候補者をアメリカの職に就けるにあたって、ガイガーの提案や推薦はもっとも大きな影響力を持っていました。

7. 国家の対立とドイツ圏の周縁

ヒルシュとヒルデスハイマーは、ハプスブルク帝国のユダヤ人に持続的な影響を与えられませんでした。このことは、宗教的な差異のみならず、またより一般的な水準における政治的空気の変化にも帰着します。同時代の人々は、ドイツ語を話すラビたちのコスモポリタンな世界帝国がどれほど脆いものだったかを予期できませんでした。1860年代から1870年代にかけて、ラビ神学校の近代的(再)組織化の結果、イギリス、フランス、オランダ、アメリカ合衆国は、その帝国の地図から消失しました。1874年、ガイガーの死の直後に、若いコーラーは「自由で独立したアメリカの土地、そこで定められた改革のリーダーシップ」はもはや宗教的権威をわがものとするだろう、と宣言しています。

中・東欧への移民は、新しく設けられた言語的な障壁にぶつかりました。ハンガリーでは、ユダヤ人の生活のマジャー化が1860年代に始まっています。ペストの首席ラビ、ヴォルフ・マイゼルや、その他のマジャー語の説教を望まない、できないラビたちに対し、若者たちが騒ぎ立てるのはよくある妨害行為でした。1870年代には、ラビ組織がドイツ語話者とマジャー語話者に分かれます。1846年に説教がドイツ語で行われるようになったザグレブの首席ラビ、プロイセン人のホセア・ヤコービは、大胆な路線変更によって安寧と救いを得ました。1865年、到着からまもなく、彼はクロアチア語を共同体の成員と彼自身とに課したのです。

国家的な論争の背後には、ユダヤ人内部での葛藤が潜んでいることもしばしばです。ドイツとオーストリアとが戦端を開く1866年以前から、互いをけしかけるような動きもありました。ハンガリ

一のウルトラ・オーソドクスの人々は、サタンがその本拠地をドイツに構えており、そこからオーソドクスのドクター・ラビという見かけで手下を送り込んでいるのだと考えていました。逆に、1857年、とあるユダヤ教改革派のドイツ人論者は、クラコフの学派からの前近代的な移民と、ヴェルツブルクやフランクフルトからの新しい学派の移民とを引き比べて、「かつてはオーストリアのラビ組織はポーランドのラビによって埋め尽くされていた。今はドイツの神秘家たちによって侵略されている」と述べています。とあるモラヴィア人は、グッゲンハイムがセーケシュフェヘールヴァルに招聘されたことについて、二重に移民排斥的なトーンでコメントしています。「ハンガリーでは、お高いドイツ語によるロマンティックな熱狂に、人々がまだ魅了されている。」オーストリア＝ハンガリーのネオローグ〔改革派〕の新聞は、全面を使って「敬虔主義者ないしドイツのハシディズム」に対して論争をしかけました。「その指導者はフランクフルトのヒルシュ博士であり、オーストリアのラビの職を占領している異邦人たちは彼の模倣者である」と。改革派ラビのレオポルト・レーヴは、この事態を意地悪く「ネオ・オーソドクスのドイツ・ロマン主義者たちが、ハンガリーにおいてドイツでは守ろうともしなかった伝統のために戦っている」とみていました。そして彼らを「カルパティアの向こうから来た、以前の児童虐待者」になぞらえることさえするのです。普墺戦争が起ると、レーヴは排外主義のベルを鳴らし、バイエルンのオーソドクスの東への移民を、ビスマルクの軍隊の進駐になぞらえます。「彼らはもはやフランクフルトに未来がないとわかっている。…〔中略〕…またドイツ全土で彼らの命運が尽きていることも。ゆえに彼らは、現在のドイツの宰相のように、重心をブダペストへと移しつつあるのだ。」

1866年のドイツの戦争は、アメリカのユダヤ人の論争の中にも、逆説的な形で反響しています。1867年、プロイセンからフィラデルフィアに移住した保守派のマルクス・ヤストロフがオーストリア生まれの改革派の頂点、アイザック・マイヤー・ワイズの支配に挑戦した際、彼は「ポーランドのフツペ〔無礼者〕」と非難され、「東のハシッド」と呼ばれました。ヤストロフは、ドイツの進歩的

改革主義とポーランドの遅れた宗教性という図式的な対比に異議を唱え、ワイズのオリエンタリスティックなステレオタイプを戯画化して次のように述べます。「何かしら不愉快な声に直面したときは、ワイズ氏はいつも『フィラデルフィアのニューヨークの英語を話すポーランドのオーソドクス』を夢想するようだ。というのも、彼が夢見ているのは、フィラデルフィアのニューヨークの英語を話さないドイツ語の改革なのだから。」ハンガリーのユダヤ人ナショナリストがドイツの学者をポーランドのタルムード学者になぞらえるという驚くべき事例と同様に、ドイツ・反ドイツというステレオタイプの利用は、アメリカにおいても（恣意的ではありますが）普及していました。

しかし、彼らとその身上においてどれほど対立していたにせよ、アメリカ合衆国の改革派のラビたちと、オーストリア＝ハンガリーにおけるオーソドクスの人々とは、移民として夢を共有していました。彼らは共同体の生活が、妥協のない仕方でも構想されるのみならず、また実践されるもする隠れ家を探していたのです。両極端の潮流は、ドイツのラビたちの文化的総合を生み出した、伝統と近代の葛藤にみちた結合を逃れようと懸命だったのです。ドイツのラビたちがとった文化の累積と宗教的な妥協線は、彼らの意識に強い緊張をもたらしました。アインホルンたちも、ヒルデスハイマーたちも、政治的抑圧も宗教的な折衝もなく、彼らのイデオロギー的な選択により適しているとみなした土地に入ってゆく入植者でした。避難民であると同時に征服者でもあった彼らは、移民を純粋な宗教的原理が貫徹する約束の土地への出発〔Exodus：出エジプト〕として描き出しました。その約束の土地は、いまだ論争と闘争によって、より成熟した段階のドイツとして創設される途上にあつたのですが。

ボヘミアにおけるドイツ人ラビの指名は、1880年を超えて存続できませんでした。その時、チェコ語は当地の公式言語となったのです。確かに、ピルゼンでは1882年にプロイセンのラビが採用されましたし、プラハのラビ組織では、ドイツ語話者が多数派を維持していましたが、それでも、それもチェコ語の説教師によって完結しました。同年、プロイセン人ラビのアードルフ・ヤラチェフスキ

は、片田舎の町クラッタウで、チェコ・ナショナリズムのユダヤ人に対する重圧によってユダヤ人が公共生活でのドイツ語使用を放棄することになった、と不満を漏らしています。ドイツ語説教のためにシナゴグで侮蔑されると、ヤラチェフスキはこの状況を「痛ましい」ものとして描き出しています。ルードヴィヒ・フィリップゾンが彼を呼び戻すために全力を尽くしました。「この哀れな人は、今や世界中で過熱しているナショナリズムの熱狂の犠牲者の一人なのだ。」ほんの数年後には、皇帝アレクサンダー二世が彼の帝国におけるロシア化を推進し、オデッサのラビ、シメオン・レープ・シュヴァーバッハーの地位もまた、ハンガリーやボヘミアの彼の仲間たちと同様に痛ましいものになりました。こうした国々が、ひとたび独自の形で文化的適応を果たした近代的なユダヤ文化を生み出すと、かつてのようなドイツのラビたちの制限のない労働市場として残るのは、スイスやスカンディナヴィアくらいのものでした。

結論

アシュケナージ・ユダヤ人の、解放以前の学問的な風土においては、移民とは日常生活の一つでした。解放期を通じて、それは職業選択の問題と成り、政治的・経済的なプッシュ要因と、ある種の使命感とを巻き込むようになります。ヴィルヘルム期、そしてヴァイマル期のラビたちは、ほとんど移民をしませんでしたが、国民社会主義政権下で生活するラビたちにとって、1933年以降、国外への移民は端的に必要なものとなります。

19世紀のラビたちの移民先は、普通のユダヤ移民と異なっていることもしばしばでした。宗教的・職業的なアイデンティティを貫く動機によって、彼らは近代というモデルの先駆者となり、時には宣教者となりました。そうしたモデルを、彼らは彼ら自身のものとは異なった背景を持つ共同体へと輸出しようとしたのです。間大西洋的な移民を選んだラビたちは、彼らの普通の仲間たちとは異なった動機な見通しを持って海を渡りました。しばしば共同体での職と、安定した将来への招きに従って。19世紀の移民ラビたちは、1848年に活動家であって幾人かの例外を除けば、比喩的な意

味においてのみ、避難民でありえます。彼らの多くはドイツ・ユダヤ教のメインストリームが彼らの宗教観と共存しえなくなった時に、移民していったのです。彼らは、彼らの望む形のユダヤ教が——進歩派であれ、伝統派であれ——妥協せずに実現できるような行き先を探し求めていました。他の人々は、彼らの固有の信条を、未だそれが受容されていない他国にも広めたいという熱望にかられていました。マックス・リリーエンタールのリガやサンクトペテルブルクでの活動は、おそらくこうした文化宣教活動の最も明白な事例でしょう。しかし、ハンガリーにおける近代的オーストクスの態度は、そこからさほど遠くはありません。「避難民」たちは、ドイツ・ユダヤ人の多数派を占める一般的な潮流の中で、彼らの地位が阻害されてゆく状況から逃げ出したのです。「宣教者」たちは、ドイツ・ユダヤ人と外国のユダヤ文化との間の文化的な隔たりを接近させようと試みしました。

ヒルデスハイマーやコーラーのように、両者が融合することも多くありました。ドイツにおける孤立からの逃避は、外国における「文明化の使命」によって補填されるのです。こうした移民たちは、「出エジプト」型と言えるような考え方を共有していました。そこにおいては、逃亡と宣教とが相互補完的な動機となって実感されましたし、それらはドイツ・ユダヤ文化のモデルの一つを、元々の国よりも好都合であろう環境で実現するという願望と結合してもしました。このタイプの移民には、エルンスト・ゲオルク・ラーヴェンシュタイン以来の古典的な移民理論（1885年）が語る区別を適用できません。つまり、彼らは望まずして避難民となったか、社会的栄達を求めての自主的に移民したのか、あるいはイデオロギーに駆り立てられた開拓者たらんとしたのか、というような区別です。移民とは自然な振る舞いであり、定住性こそが過去のものになった、というような21世紀の移民理論もやはり適用できません。移民とは、文化的な創造行為であり続けます。それは近代文化の一部です。ユーリ・スリョーズキンによれば、その多くはユダヤ人に負うべきものだということですが、とりわけ、ラビたちが近代に立ち向かうべく採った幾つかのアイデンティティ戦略に負う

べきものでもあるのでしよう。出生地へ深く結びつきながらも、ラビたちは精力的に、新しい国民的なアイデンティティの構築作業に身を投じて行きました。オデッサのシメオン・シュヴァーバツハーのような例外的な人物だけが、移民としての外面的な疎外感を、内面的な力への道だとして称揚することができました。彼はどんな種類のナショナルな特殊主義も、やがてコスモポリタニズムによって克服される、という願望を表に出しています。多くの移民ラビたちは、彼らの仲間たちが持つナショナルな強い連帯感を別の方向に向けようと努めました。それはかつては彼らをドイツと結びつけましたが、しかし彼らの新しい帰属意識においては、ユダヤ的な意味でのドイツ性の限界を、再生産することにもなりました。